2020年11月7日　インド大使館　バガヴァッド・ギーター

(事情により協会本部からストリーミング)

・読み：第7章1～10節

第5章でのアルジュナの質問は、シュリ・クリシュナがある時はギャーナを、また別の時にはカルマを推奨するので、いったい自分はどちらを選ぶべきなのか、ということでした。

ここでギャーナは普通にイメージする学問のことではありませんし、カルマも通常の意味での仕事のことではありません。ギャーナの実践、カルマの実践というのはそれぞれギャーナ・ヨーガ、カルマ・ヨーガのことです。

『バガヴァッド・ギーター』を学ぶ目的はただひとつ悟りであり、それは真理の悟り、自分の本性の悟り、神の悟り、ブラフマンの悟り、アートマンの悟り、など表現はいろいろでも同じ悟りです。ギャーナとカルマ両方を一緒に実践できないので、アルジュナは混乱しています。

もし大阪から東京へ行きたいなら、その交通手段としては自動車、新幹線、飛行機、などいろいろありますが、どれかひとつに決めなければならず、新幹線と飛行機に同時に乗ることはできません。

目的は東京に行くことでも方法はいくつかあり、それを選択しなければならないのです。

ギャーナ・ヨーガを実践したいなら、すべてを放棄してアートマン/ブラフマンにフォーカス

しなければなりません。

カルマ・ヨーガを実践したいなら、毎日の義務を行わなければならず、アートマンにフォーカスはできません。普通の我々は、粗大なからだ、精妙なからだのどちらにせよ、からだにフォーカスしています。この状態では、アートマンにフォーカスはできません。

「私のためにはどちらがいいのか？」とアルジュナは尋ねます。

シュリ・クリシュナは、「道は二つあっても目的と最終的な結果はひとつだ」と答えます。

**目的は悟り結果も悟りであり、二つの道のどちらかが優れているということはありません。**

ギャーナ・ヨーガでアートマンにフォーカスしようとしても、普通の心の状態では不可能です。ギャーナ・ヨーガのためには心がきれいでなければなりません。

心がきれいであるとは欲望や執着がないことですが、ギャーナ・ヨーガで心の清らかさが求められるのは、欲望や執着の源がからだだからです。

家族や楽しみに対する執着も、からだに起因しています。

欲望や執着が減少してくると、自分をからだと同一視することもなくなっていきます。

(粗大なからだ＝肉体　　精妙なからだ＝心・感覚)

からだ意識があまりなくアートマン意識が強い人なら、ギャーナ・ヨーガの実践を始められます。しかしもしそれができなくても、失望しないでください。

そのような人たちにはカルマ・ヨーガの道があります。

カルマ・ヨーガは毎日の仕事を利己的に自分のために行うのではなく、非利己的になって神のために行う道です。利己的から非利己的への転換です。

「自分と家族」が中心だったのを、神中心へと変化させます。

**カルマはできてもカルマ・ヨーガができるとは限りません。**

実社会でも仕事を完璧にこなす有能な人はいますが、その人が即カルマ・ヨーギだということにはなりません。両者の違いは何でしょうか？

カルマ・ヨーギは仕事をしながらも心安定して静かであり、かつ幸せな状態にあります。

ストレス、苦しみ、悲しみ、怖れ、がありません。

カルミー(働く人)とカルマ・ヨーギの違いをはっきり理解してください。

一生懸命仕事をこなし義務を果たせばカルマ・ヨーギになる、とは限りません。

ただ単にカルマをするのとは別の種類の実践が必要です。

カルミーからカルマ・ヨーギになるための実践は肉体レベルではなく、心のレベルでの実践です。見た目には違いは分かりませんが、心のレベルで変化するのは容易ではありません。

心が変わればよいだけだと聞くと簡単そうですが、実は一番難しいのです。

いざ始めてみると、神を喜ばせるために行為する、自分の力はすべて神から来ていると考える、仕事の結果について思い悩まずすべて神に任せる、などの実践はとても難しいのです。

普通の我々は神ではなく、上司を喜ばせて昇進しようと考えます。

お金を稼ぐ目的も家族を養うことであったり、自分自身の楽しみのためであったりします。　　そこには神を喜ばせるという思いはありません。神という考えすらありません。

まずは神が存在すると考える ⇒ その神のことが好きである ⇒ 神を愛する ⇒ 自分の人生の中心は神であると考える、これが信仰が深まっていくプロセスなのですが、いきなりこの深いレベルの信仰に達することはありません。

いっぽう、深い信仰がなければカルマ・ヨーガはできません。

口先で「神に任せます」と言っても、信仰がなければ意味がありません。

そしてこの信仰は肉体には関係のない、心のレベルの問題です。

もちろん最初の段階は、上司から評価されるため、家族を扶養するために仕事をしているのが現実ですが、その段階に留まっていてはカルマ・ヨーガはできません。

自分の才能を評価されると、多くの人がそれは神から来ているとは考えずに、口に出して自慢はしないまでも、心の中ではプライドを満足させられ喜びます。

「自分は精一杯仕事をした。だから結果がどうあろうと心配せず、あとは神に任せる」というのもなかなか難しく、多くの人は「一生懸命仕事をしたのであとは神に任せる。けれど結果もやはり心配だ」と考えるので、ストレスはなくなりません。

神の名を唱えて川を渡りながら自分の衣服が濡れないかと心配するのは、本当の信仰とは言えません。*(註1)*心の変化なくしてカルマ・ヨーガは不可能です。

信仰は一歩一歩深まっていきます。

最初のうちはすべてが神のためではなく、仕事の目的に自分や自分の家族が含まれていてもかまいませんが、それを徐々に神中心に変化させていく努力が必要です。

最初は他人から褒められるといつも自惚れの気持ちが起こっていたのが、徐々にその気持ちが起こったり起こらなかったりという風になり、そのうちにあまり自惚れなくなります。

そうなるためには心の中での戦いがあり、それが実践です。

実践が進むと人生が自分中心、家族中心だったのが、ゆっくりと神中心へと変化します。

こうしてカルマ・ヨーガができるようになります。

このようにして欲望や執着がなくなり、からだ意識が希薄になり、自分とからだの同一視がなくなってくると、心が清まりギャーナ・ヨーガに取り組むこともできるようになります。

**カルマ・ヨーガが進むとギャーナ・ヨーガの実践もできるようになりますが、ギャーナ・ヨーガをしなくてもカルマ・ヨーガだけで悟ることはできます。**

以前ギャーナ・ヨーガの実践に必要な、シャマ、ダマ、スラヴァナ、マナナなどについて説明しました。

カルマ・ヨーガの実践には、両極端(pairs of opposites)の間のどのような状況にも影響されず心が静かであること(サマットヴァム)、が重要であると話しました。

カルマを続けている限り、例えば賞賛と非難などこれら正反対の状況を経験することは避けられません。寒暑、苦楽、友と敵などは我々の心をかき乱し、その心の状態ではヨーガはできません。ヨーガは静かな心でなければできません。

圧倒されて動いている心には合一(ヨーガ)は不可能です。

我々の心をかき乱すものとして説明した「両極端」は自然環境、人間関係なども含めて、我々にとって外的要因ですが、心の静けさにとって障害となる内的要因もあります。

怒り、強欲、肉欲、自惚れ、嫉妬、暴力などはサマットヴァムの障害となる我々の内部の要因です。これら外的、内的要因にどう対処したらよいかを前回説明しました。

ある人は人生では普通のことだとして気にしません。

またある人はそれを変えることのできない運命として受け入れ、霊的実践にもその結果にも関係はないと考えます。

別の人は、自分の前世のカルマとして現生の苦しみや悲しみがある、と受け止めます。

しかしそこで「しょうがない」と諦めてしまうのは、否定的な考え方です。

カルマの法則をより肯定的にとらえる人は、「悪いカルマがあるなら、今生では良いカルマを積み重ねよう」と考えます。スワミ・ヴィヴェーカーナンダもこの考え方を勧めています。

「私が学ぶための試練としていまの苦難が与えられている」という考え方もあります。

プラクリティ、マーヤー、あるいは神が試練を与えていると考えます。

また、「これも消える、あれも消える、すべて消える」という教えも紹介しました。

しかし同時に考えなければならないのは、「では何が消えないのか？」ということです。

消えないものは真理であり神です。消えないものについても考えてください。

すべてが一時的であり文字通りすべてがなくなってしまうなら、心の平和は得られません。

すべては消えるがたったひとつ、神/ブラフマン/アートマンは消えません。

ここまではこれまでの講話のまとめであり、これでサマットヴァムについては終わります。

これから新しいテーマについて話します。

これに関連するのは、『バガヴァッド・ギーター』第5章16～26節です。

「ギャーナ・ヨーギのしるしは何であるか？」というのがそのテーマです。

単にギャーナ・ヨーガを実践する人もギャーナ・ヨーギと呼ばれますが、ここではギャーナ・ヨーガを実践した結果悟った人のしるしについて説明します。

ここで、**ジーヴァン・ムクタ**という言葉が出てきます。

ジーヴァン・ムクタは二つの言葉が合わさってできている言葉です。

**Jivanmukta**(jivat - mukta)　*(註2)*

ジーヴァット・ムクタがジーヴァン・ムクタになります。

ジーヴァットは「生きている間＝life」のことであり、ジーヴァンも同じです

ムクタは解脱している人の意味です。

ですから、**ジーヴァン・ムクタは肉体を持ちながら解脱できている人**のことです。

ムクティ(Mukti-名詞)は解脱、ムクタ(Mukta-形容詞)は解脱している人の意味です。

普通の解脱のイメージは「生まれ変わりや輪廻がない」ということですが、さらに深く考えるとその後はどうなるのかが問題になります。

死後再び生まれ変わることがないというのはどういう状態にあるのか、ということです。

この疑問を持つのは当然であり、協会発行の『輪廻転生とカルマの法則』にもこれについて書かれています。

解脱した後の状態について、バクタ(信仰者)とギャーニそれぞれのアイデアがあります。

**バクタの見方では、解脱したバクタはその後ずっと神と一緒にいます。**

神の場所に行き、そこで永遠に神と共に過ごします。

普通の我々も、家族と一緒に暮らす、友人と同居する、旅行に行って友人と一緒に宿泊する、などをイメージすることはできます。

これらのイメージと、「神と一緒に住む」はどう違うのでしょうか？

もし自分の家族と一緒に住むことと神と一緒に住むことにあまり違いがないなら、霊的実践をする気が失せてしまいます。神と一緒に住みたいという気持ちが起こりません。

解脱を求めようとしなくなり、瞑想や神について考えることもしなくなります。

私の質問の意味が分かりますか？

参加者：喜びがある　幸せがある　苦しみがない　避難所になる　etc.

もし現実の家族との間に特にトラブルがなければ、家族との生活にも同様に幸せや喜びがあるとは言えませんか？

神と一緒に住むことを「喜びにあふれた状態」と表現することは、決して間違いではないのですが、実はこれはとてもデリケートな問題なのです。

普通の我々の心の状態は精妙ではありません。

必然的に我々が喜びを感じるのはせいぜい、美味しい食べ物、美しい景色や音楽程度であり、それ以上の喜びのイメージを持っていません。

ですから、「神と一緒に住むのは喜びに満ち溢れた状態である」という言葉を聞いても、トラブルなく家族と暮らしている人は、自分の現実の生活をはるかに超えた喜びをイメージできないのです。

いっぽう霊的に進んだバクタの心は清らかで、喜びについて彼らが持つイメージは我々のように粗大ではなく、はるかに精妙です。

粗大な心の我々は精妙な喜びについてイメージできません。

そして至福はとても精妙な喜びです。

**バクタは「神と一緒に住むという精妙な喜び」をはっきりとイメージすることができ、そのイメージが解脱のための霊的実践のモチベーションになります。**

普通の我々はこのイメージができないので、霊的実践のやる気が起きません。

バクタは神と一緒に住む至福は家族との生活では絶対に得られないと知っているので、解脱を求めます。

解脱を求める動機として、「もう生まれ変わらないから」というのは消極的であり、「至福が得られるから」というのがもっと前向きの考え方です。

神の住む場所としてのヴリンダーヴァンには、地上のヴリンダーヴァンと永遠のヴリンダーヴァン(ニッティヤ・ヴリンダーヴァン)があります。

北インドにあるヴリンダーヴァンは、現れてはまた消えます。

破壊の時ヴリンダーヴァンはなくなります。

ヴリンダーヴァンでシュリ・クリシュナが遊んだ場所はどこだったのか、長い間不明でした。

神の化身であるシュリ・チャイタニヤ・デーヴァはヴリンダーヴァンに行き、どこがシュリ・クリシュナの遊びの場所だったか指摘しました。

そこは鬱蒼とした森であり、人々はその場所を知らなかったのですが、シュリ・チャイタニヤの前世はクリシュナだったので、彼は自分がどこで遊んだか記憶があったのです。

いま話したヴリンダーヴァンは、地上のヴリンダーヴァンのことです。

永遠のヴリンダーヴァンは破壊の時もなくならず、そこが神の住む場所です。

地上のヴリンダーヴァンは、永遠のヴリンダーヴァンが反射して現れた場所です。

この永遠のヴリンダーヴァンに神はいつも住んでおり、信者も一緒にいます。

バクタ(バクティ・ヨーギ)の解脱の目的はそこに住むことです。

永遠のヴリンダーヴァンを天国と呼んでもかまいませんが、この天国は普通の我々が考える天国とはまったく違います。一般の人がイメージする天国には世俗的な喜びがあふれています。

そこでの喜びは現実世界よりは長い時間続き、量的にはるかに多くても、しょせん我々がイメージできる世俗的な喜びの延長線上にあります。

たくさん遊ぶものがあり、病気もない世界で、中には少しは精妙なものもあるかもしれませんが、内容的には現実世界の喜びと同じです。

バクタにとっての天国のイメージはまったく違いますが、それはイエスの天国、ラーマクリシュナの天国(ラーマクリシュナ・ローカ)も同様であり、そこにある喜びは世俗的喜びではありません。感覚的な喜びは何もなくても神といるだけで喜びに満ちている、というのがこれらの天国の状態です。

**なぜ神と一緒にいるだけで喜びにあふれるのかと言えば、それは神の本性が、サッチダーナンダ(絶対の存在・知恵・至福)だからです。**

神が絶対の至福なので、その神の場所に入った私も至福が得られるのです。

シュリ・ラーマクリシュナについてイメージしてください。

ドッキネッショルに住むラーマクリシュナを訪れても、そこでは別にご馳走が振舞われるわけではありません。

そこに住む直弟子たちの食事もマザー・カリーに備えた後のお下がりなどで、世間一般の基準から見るとかなり質素でした。若い青年たちの空腹を満たすにはとても足りませんでした。

通常の娯楽と呼べるものは何もなく、そこにあったのはラーマクリシュナ自身の存在、彼の語る話であり、たまには彼の歌や踊りがありました。

あるのはこれだけだと聞いて、普通の人はラーマクリシュナを訪れようと思うでしょうか？

しかし師のもとを訪れた信者はその後コルカタに戻ってからも、一か月近く喜びに包まれた状態が続いたと言われています。とても特別なことではないですか？

ラーマクリシュナを訪れ、会ってその顔を見て、話を聞いた後、一か月喜びが続いたのです。

とても世俗的な場所であるコルカタに戻ってからも、ずっと喜びが続いたのです。

かつてスワミ・トゥーリヤーナンダジは次のように言いました。

もし神の化身に一回でも会えればその人の人生にとって十分である

ほとんどシュリ・ラーマクリシュナ自身の存在とその言葉だけで、どうしてこのように多くの人々に喜びを与えることができたのでしょうか？　何が特別なのでしょうか？

他の聖者に会っても、有名な寺院に行っても、このようなことは起こりません。

少しは心が清まって、多少の喜びはあってもこれほど長くは続きません。

ラーマクリシュナの人格の何が特別だったのでしょうか？

答えは単純で、ラーマクリシュナ自身がサッチダーナンダであり至福の源だったので、彼の近くに来た人たちもその影響で喜びを得たのです。

シュリ・ラーマクリシュナはただの人間ではなく神の化身だったのであり、釈迦もイエスもそうでした。「神の場所に行きそこにずっと住めば喜びにあふれた状態になる」というバクタの持つ解脱のイメージを理解してもらうため、ラーマクリシュナの例を引用しました。

書き残されたシュリ・ラーマクリシュナの信者たちの証言から、天国でなくともこのような至福があったということがわかります。

家族との生活でこの喜びが得られるでしょうか。

ある時は平穏な生活でそこに喜びを感じていても、トラブルが起きると家族から離れたい、家を出たいと考える人もいるのではないでしょうか。

その反対にバクタは神と共にいることの喜びに永遠に浸っていたいと考えます。

バクタの解脱についてのイメージについて説明しましたが、ギャーニは解脱をどう考えているのかお話しします。

否定形の表現を使えば「生まれ変わりがない」ということですが、肯定形の表現をするなら、**ギャーニの解脱のイメージは「ブラフマンと私が一つになる」です。**

バクタの場合は、信者(バクタ)と神(バガヴァン)は別々の存在でした。

楽しむ人と楽しみの対象がなければ、楽しむという行為は成立しません。

私と食べ物の二つがなければ、食事の喜びはあり得ません。

甘いものを食べて喜びを得たいなら、私がいて、砂糖があり、そして私が砂糖を食べます。

私自身が砂糖になってしまったら、砂糖を味わう喜びは得られません。

バクタは砂糖(神)になりたくありません。

自分のアイデンティティを保ちながら神の喜びを味わいたいので、解脱した後も自分と神の二つの存在がずっと続くことをイメージします。

これに対してギャーニにとっての解脱はブラフマンとひとつに溶け合うイメージですが、ブラフマンもサッチダーナンダなので**至福という結果は同じです。**

川の水の源は海です。海の水が水蒸気になり、水蒸気が雲になり、雲が雨を降らせ、雨が山の斜面に落ちてそれが川の水となり、その川が海へと流れ込む。

海から来て海へ帰る、元の場所に戻るだけです。

ブラフマンが源である我々が自分の本性であるブラフマンに再び戻るのであり、苦しむことでも悲しむことでもありません。これがギャーニの解脱のイメージです。

バクタ、ギャーニそれぞれの解脱のイメージを説明しましたが、解脱について話します。

**解脱という言葉の対義語は束縛であり、ほぼ同義語と言えるのが自由です。**

サンスクリットでムクティ、ムクタの対義語はそれぞれ、バンダナ、バッダーです。

Mukti – Bhandana　　　　名詞

Mukta – Baddha　　　　　形容詞

夕方のアラーティ(礼拝)の讃歌「Khandana Bhava Bandhana(カンダナ バヴァ バンダナ)」は「ラーマクリシュナの恩寵で世俗的な束縛(バンダナ)が消える(カンダナ)」という意味です。

ジーヴァは肉体をまとった個人的魂のことですが、これは3つに分けられます。

**束縛された人**　　　　　　バッダ・ジーヴァ(Baddha-Jiva)

**解脱を求める人**　　　　　ムムクシュ・ジーヴァ(Mumukshu-Jiva)

**解脱した人**　　　　　　　ムクタ・ジーヴァ(Mukta-Jiva)

まずは束縛について説明します。**束縛が分からないと、それから解放された状態である解脱も分かりません。**束縛についての皆さんのイメージは何ですか？

粗大な肉体レベルの束縛とは、たとえば「縛り付ける」ことです。

囚人が鉄の鎖で牢獄につながれているイメージです。

昔アフリカから連れてこられた奴隷たちは、鎖で縛られ船に乗ってやって来ました。

精妙な心のレベルでは「縛る」と言わず、「束縛」という言葉を使います。

肉体レベルで我々を縛る鎖の種類は鉄以外にもいろいろありますが、心を束縛する鎖の種類も欲望、執着、強欲、怒り、肉欲、自惚れ、嫉妬、サムスカーラ、カルマ、サットワ、ラジャス、タマスなど多種あります。

粗大なレベルで縛られるのは肉体ですが、精妙なレベルでは何が縛られるのでしょうか？

アートマンです。魂が束縛されるのです。

奴隷や囚人を肉体レベルで自由にしたいなら、鉄の鎖を物理的に切断すればそれは可能です。

心のレベルでの束縛からの解放とは、その原因となっている執着や怒りを取り除くことです。

肉体レベルの自由と霊的レベルの自由は、言葉は同じ自由でも全く質が異なります。

またこの二つ以外にも、経済的自由、発言の自由、信教の自由などありますが、霊的自由に比べると、それ以外の自由はすべて有限で一時的であり今生限りです。

それに対して**霊的自由は永遠**であり、これが大きな違いです。

これまでの説明で束縛とは何かがわかったと思います。

束縛とはアートマンを縛ることであり、その結果もたらされるのは苦しみ、悲しみ、怖れです。我々は苦しみ、悲しみ、怖れを好まないので、これを解消しようと解脱を求めます。

解脱ができなければこの苦しみの状態はなくならず、生まれ変わってもずっと続きます。

バクタ、ギャーニが解脱を求める動機としては二つあります。

**➀二度と生まれたくないから**

**➁至福**

➀は消極的な理由です。➁についてはバクタとギャーニでイメージの違いはありますが、苦しみ、悲しみ、怖れ、無知が「なくなるだけでなくさらに永遠の喜びが得られる」という、より積極的な理由です。

一般的に解脱は肉体を捨てた死後達成できると考えられていますが、**ジーヴァン・ムクティは肉体を持ちながらの生前解脱のこと**であり、ヒンズー教の中でもとても特別なアイデアです。

スワミ・トゥーリヤーナンダジはある問題について混乱していました。

永遠に自由という本性を持ったアートマンがなぜ肉体という檻の中に入ったのか、言い換えればなぜ人間としてこの世に生まれたのか、という問題です。

ある聖典の一節にその回答となる言葉を見つけたトゥーリヤーナンダジはとても喜びました。

**その答えとは、「ジーヴァン・ムクティの至福を味わいたいから」でした。**

「我々のすべてのトラブルは肉体を持ったことに始まるのだから、からだなどないほうがいい」に比べると、とても肯定的な考え方です。

ギャーニはこのことを知っているので、生まれ変わることをさほど怖れません。

また生まれ変わっても、ジーヴァン・ムクティの至福を得られる可能性があるからです。

『ヴィヴェーカ・チューダーマニ』にはジーヴァン・ムクティとはどんな状態か、その特徴について約20節にわたって記述があります。

先ほども言ったように、ジーヴァン・ムクティについて『バガヴァッド・ギーター』では第5章16～26節に書かれていますが、これについては今後解説していきます。

このジーヴァン・ムクティと、以前説明したスティータ・プラッギャー(安定して継続する智慧)、グナーティータハ(グナの超越)は皆同じ状態を意味しています。

『バガヴァッド・ギーター』第2章54～最終節まではスティータ・プラッギャーについて書かれていますし、第14章22～27節はサットワ、ラジャス、タマスのトリグナを超越したグナーティータハについて説明されています。

**ジーヴァン・ムクティ ＝ スティータ・プラッギャー ＝ グナーティータハ**

『バガヴァッド・ギーター』の中にこれらの記述があるのは、そのような人が現実に存在するからです。もし存在しないのであれば、それらの人の特徴についての説明は無意味です。

安定した智慧を持った人、グナを超越した人、肉体を持ちながら解脱した人、は実在したのであり、聖典にそのしるしについての記述があることが存在証明です。

神の化身だけでなく、その信者たちも聖典で説明されているその特徴を備えていました。

たとえば、スワミ・ヴィヴェーカーナンダジ、ブラマーナンダジ、トゥーリヤーナンダジ、プレマーナンダジ、そしてイエスや釈迦の直弟子たちもそうでした。

来月は第5章16節から説明します。

Ｑ＆Ａ

参加者：

本日も有難うございました。カルマ・ヨーガに関連してですが、自分の行為が本当に神様を喜ばせているのかどうか、わかる方法はありますか？

マハラジ：

神様が何を好み何を嫌うのかを考えてみれば、わかるのではないでしょうか。清らかさ、困っている人への奉仕は神が好むことであり、逆に不純や困っている人を助けないことを神様は「嫌い」とは言いませんが、好きではないはずです。神様は皆さんの目の前に現れて、「あなたのそのやり方は好きです、嫌いです」とは言いません。神様が好きなことを行い嫌うことはしない、これが答えです。

参加者：

質問ではありませんが、今日のお話を聞いて自分の中に怖れや悲しみが随分あることに気づきました。以前はそれほど気づいてはいませんでした。これらの感情が束縛だということが理解できたので、今後精進してカルマ・ヨーガを実践したいと思います。有難うございました。

マハラジ：

解脱に関連して束縛について説明しました。そして魂を束縛する鎖として、苦しみ、悲しみ、欲望、執着などを挙げました。これらはアートマンを縛る鎖であり、束縛がなければアートマンは自由であり至福です。鎖を断ち切って解脱することが必要だということを説明するため、鎖である束縛についても話しました。

参加者：

有難うございました。今日のお話の中では天国についての説明が印象的でした。私も天国について、たくさんのきれいな花が咲いてご馳走があり楽しいことがいっぱいある、という一般的なイメージしか持っていませんでした。ですから、輪廻が止まるのは良いことなのでしょうが、どう良いのかがわからないまま勉強していました。今日のお話で少しだけわかりました。有難うございました。

参加者：

ジーヴァン・ムクタに会った人は一か月ぐらい喜びが続いたということですが、ラーマクリシュナ以外にはどのような方がいらっしゃいましたか？

マハラジ：

探してください。信者たちがラーマクリシュナに会うためドッキネッショルを訪れたように、あなたもそういう人を見つけてその聖者の場所に行ってください。もちろんラーマクリシュナのような方はなかなかいません。彼は聖者の中でもとても特別な存在です。

参加者：

スティータ・プラッギャー、グナーティータハ、ジーヴァン・ムクタは同じ意味だとおっしゃいましたが、私は束縛されていたその束縛を断ち切って解脱したのがこれらの人たちだと理解しています。そうすると、イシュワラ・コーティやヴィッギャーニや神の化身であるタクル(ラーマクリシュナ)は、この上記3つのカテゴリーに該当しないのですか？

マハラジ：

イシュワラ・コーティも神の化身もみなジーヴァン・ムクタです。**悟った後も肉体を維持している人はジーヴァン・ムクタです。**中には本当に死の直前に悟りを得る人もいますが、このような悟りとほとんど同時に亡くなってしまう人のことをジーヴァン・ムクタと呼ぶことはありません。悟った人はみなジーヴァン・ムクタですが、ジーヴァン・ムクタにもレベルがあります。ジーヴァン・ムクタの中でも特別に高いレベルの人たちがイシュワラ・コーティであり、それよりもさらに高い最高のレベルの人が神の化身と呼ばれます。すべてのジーヴァン・ムクタがイシュワラ・コーティではありませんが、聖典に書かれているそのしるしはかなり共通しています。

参加者：

私は大分からの参加です。質問はありませんが、自由な本性を持つアートマンが肉体に入ったのは、肉体という束縛の中でも解脱の至福を味わいたいからという説明を聞き、肉体はすべてのトラブルの始まりだけれど、同時に肉体を持つことは魅力的な素晴らしいことだと思えました。ですからこの肉体を持ったまま神様と一緒にいられるよう、日々努めようと思いました。

マハラジ：

本当に素晴らしい考え方です。生まれるからトラブルが起こると多くの人は考え、その意味で解脱を求めます。しかし先ほどのトゥーリヤーナンダジの言葉を聞くと、肉体に対する否定的なイメージは随分変わります。前回もトラブルとは我々に学ばせるため、神またはプラクリティティが敢えて我々に与えた試練である、という肯定的な考え方を紹介しました。同様にトゥーリヤーナンダジの教えによって、肉体を持って生まれることを肯定的にとらえられるようになります。

註1)これは『ラーマクリシュナの福音』の中にある話で、大意は以下の通りです。

乳搾りの女性が川の対岸に住むブラーミンにミルクを提供していました。

船の便が不規則だったため、彼女は毎日時間通りに彼にミルクを供給することができませんでした。ある時遅刻したことを叱られた貧しい女性は、「どうしたらいいのでしょうか？　私は家から早く出発しますが、船頭と乗客のために川の土手で長い間待たなければなりません」と言いました。

僧侶は、「女よ！神の名を口にして世俗の海を渡る人がいるのに、あなたはこの小さな川を渡ることができないのですか！」と言いました。

純朴な心を持った女性はこの簡単な川の渡り方を知って、とても嬉しくなりました。

次の日から、彼女は当然のように早朝からミルクを持ってくるようになりました。

ある日僧侶はその女性に、「どうしてあなたは最近遅刻しなくなったのですか？」と尋ねました。乳搾りの女性は、「私はあなたが私に言ったように、主の名前を叫んで川を渡ってくるのです」と答えました。ブラーミンはこれを信じられませんでした。

彼は、「あなたはどのように川を渡るかを、私に見せることができますか？」と聞きました。女性は彼を連れて水の上を歩き始めました。

彼女は彼女の後ろで悲しそうにしている僧侶を見て言いました。

「グルよ！なぜそうするのですか？　あなたは口では神の名を唱えていますが、同時に手で自分の服が水に触れないようにしているではないですか！ あなたは完全に神に頼ってはいません」

註2)ライブ・ストリーミングでホワイトボードに書かれたスペルを修正してありますので、参加者は注意してください。